

令和 7 年12月19日

三鷹市議会議長 伊 藤 俊 明 様

文教委員長 大 倉 あき子

文教委員会管外視察結果報告書

本委員会は、令和 7 年度管外視察を下記のとおり実施したので報告いたします。

記

1 視察期日

令和 7 年10月20日（月）から10月21日（火）まで

2 視察先

高知市（高知県）、香美市（高知県）

3 視察項目

(1) 土佐山学舎（義務教育学校）（高知市）

本市では、三鷹市における教育・子育て支援のまちづくりに資する調査研究や提言を行うことなどを目的とする三鷹教育・子育て研究所において、令和 7 年 3 月に国立天文台周辺まちづくりに関する義務教育学校に関する研究会報告書として取りまとめられ、令和 7 年度において、国立天文台周辺地域まちづくりに関する義務教育学校に関する基本方針を策定する予定である。

今後は、義務教育学校制度の導入により小・中一貫教育の更なる充実を図るとともに、義務教育学校の特性を生かし、多様な他者との関わりの中での学びや個別最適な学びなど三鷹の目指す教育の取組を先導することをさらに進めていくこととしている。

そこで、本市議会としても、義務教育学校制度の導入の参考とするため、先進事例の視察を行った。

(2) 国際バカロレア教育（香美市）

本市では、知・徳・体の調和のとれた子どもを育てる教育内容の充実を目的として、主体的・対話的で深い学びの実現、一人ひとりが自分の「好き」や「楽しい」、「なぜ」と思うことに浸り追究する探究的な学びの推進、外国語教育・道徳教育の充実を図るなど、児童・生徒の学習過程の充実に努めている

ところである。

今後は、児童・生徒が自主的・自立的に問題や課題を発見し、解決していく探究的な学びや各教科等での学習を実社会での問題発見・解決に生かしていくための教科等横断的な学習をさらに進めていくこととしている。

そこで、本市議会としても、小中一貫教育の教育課程の充実の参考とするため、先進事例の視察を行った。

4 出張者

(1) 文教委員

大倉あき子、前田 まい、原 めぐみ、岩見 大三、石井れいこ
中泉きよし、池田 有也

(2) 同行職員

教育委員会事務局教育部調整担当部長 寺田 真理子

(3) 随行職員

議会事務局次長 黒崎 晶

土佐山学舎（義務教育学校）

1 義務教育学校の設置に至った経緯等

平成17年の高知市、鏡村及び土佐山町の合併に伴い改称された土佐山小学校と土佐山中中学校が平成27年度にふるさとに誇りをもち、将来をたくましく、豊かに、勇気をもって生き抜く児童生徒の育成を学校教育目標に掲げ、小中一貫教育校土佐山学舎を開校した。あわせて、自ら考え、正しく判断し行動できる子、他者を思いやり行動できる子、体力をつけ、体を大切にする子を目指す児童生徒像・日々の実践と資質向上に努める教師、豊かな人間性をそなえた教師、保護者や地域との連携を大切にする教師を目指す教師像・あたたかく、思いやりの風土が漂う学校、児童生徒がいきいきと活動する学校、安心・安全で環境整備が行き届いた学校を目指す学校像の3項目を目指す姿とした。

翌平成28年度に小中一貫教育を制度化する学校教育法の一部改正を受けて、高知市立義務教育学校土佐山学舎として校種変更を行った。

経緯として、まず高知市は土佐山地域の人口減少に歯止めをかけるとともに、中山間地域モデルの創造を狙いとして、平成23年3月に「土佐山百年構想」を打ち出した。構想に受け、高知市教育委員会では、「土佐山百年構想」における「社学一体・小中一貫教育プロジェクト」への位置づけのもと、施設一体型の小中一貫教育校を統合整備することとした。その後、平成25年度に土佐山小中一貫教育校開校準備協議会が設置され、校名、校章、校歌等を検討するとともに、平成27年4月に開校する「土佐山小中一貫教育校」における教育内容の方向性を協議を行った。

2 土佐山学舎の特色

(1) 土佐山学舎の児童・生徒数及び教職員の配置（令和7年度）

児童・生徒数は135名（15人×9年、校区内67名、校区外68名）

教職員は、校長1名、教頭2名（前期・後期課程各1名）、教諭16名（前期7名・後期課程9名）、事務職員1名、養護職員1名、講師2名（前期・後期課程各1名） 合計23名

そのほかに、ALT、用務員、図書館支援員、教員業務支援員、小1サポーター、学習チューター、スクール・カウンセラー

(2) 小中一貫教育の取組

恵まれた教育環境を強みに、子どもたちの夢と志をはぐくむ教育をとさやま「志」メソッドを実現するとともに、施設の一体化による機能性、小規模校ならではの機動性、円滑な学年接続を見据えた教育課程の柔軟性など、小規模

施設一体型小中一貫教育のメリットを最大限に生かし、9年間の系統的な教育活動に取り組んでいる。

ア 小中乗り入れ授業

小学校の授業を中学校の先生が進めたり、中学校の授業に小学校の先生が入ったり、小・中の枠を超えて学習指導に当たる。また、学習面だけでなく、生活面も全員の先生がサポートに当たる。

イ 縦割り活動

学年の枠にとらわれない活動の場があることは年齢とともに変化する自分の役割への気づきにつながる。リーダーを中心とした自治の力を付けるためにも、縦割り活動を大切にしている。

とさやま「志」メゾッド

前期ブロック (小学1～小学4年)	中期ブロック (小学5～中学1年)	後期ブロック (中学2～中学3年)
学級担任制	学級担任→教科担任制	教科担任制
夢を描く	自分を見つめる	道を拓く
学習への興味・関心 活動への意欲 挑戦する勇気	自他の尊重 集団への貢献 自己有用感の獲得	勤労観・職業観の形成 生き方の探求 自己の管理

(3) 英語教育の取組

地球的規模で物事を捉え、身近なところから行動することを主眼として、1年生からの教育により、英語を学ぶ楽しさに触れながら、聞く・話す・読む・書く力を伸ばすことを目的としている。取り組みとしては、英語科教員、学級担任及びALT（外国語指導助手）などたくさんの教員による指導、学習意欲の継続とキャリアアップを目指し、英語検定に挑戦している。令和6年度には、英検2級に3人、英検準2級に3人が取得している。

目標	前期 (英語に慣れ親しむ) Basic Communication	中期 (英語を聞く・話す) Standard Communication	後期 (英語で表現する) Advanced Communication
活動例	英語の絵本に親しもう 英語であいさつしよう 英語の歌・ゲームを楽しもう	英語で自己紹介しよう 英語でインタビューしよう ジェスチャーを交えて話をしよう	旅行先で道をたずねよう 自分の考えを英語で述べよう 郷土のことを英語で伝えよう

(4) 土佐山学の取組

土佐山学舎では、地域の豊かな資源・人材に関わる活動を学習の中心に据え、1年生から9年生まで、9年間の学びのストーリーを描くことで系統的に学習を進めている。

土佐山学は生活科・総合的な学習の時間として、課題解決を通して、どのようなことができるようになるかを明確にする資質・能力、これまで培ってきた知識や技能を結びつけて考え、長時間かけてじっくりと探求できる課題を設定する真正な課題、地域・社会の人々、異学年交流、国際交流など、多様な人々との出会いを通して、自己を見つめ、将来の生き方を考えさせるキャリアの3項目に取り組んでいる。

1年生から9年生の学びをつなぐ土佐山学

1年生	土佐山に親しむ	土佐山地域の魅力を体験・体感
2年生		地域の名人と出会おう！
3年生	土佐山を知る	土佐山の美味しいをぎゅっと紹介
4年生		柚子の魅力を再追及
5年生	土佐山を見つめる	土佐山の米の魅力を発信しよう
6年生		第7回土佐山ゆず祭りへの一步を踏み出す
7年生		第4回土佐山フェスティBALへの挑戦
8年生	土佐山を見つめる	大地震からどう守る？土佐山防災リーダー
9年生		土佐山の食材を追求！5年間
		集大成は、食の魅力を世界に発信！ 強みを生かしたオールイングリッシュでツアー

毎年2月に土佐山学参観日を開催（全校ポスターセッション型）

地域・保護者・協賛企業等のたくさんのお客さんに向けて、自分の言葉で語って、発表ボードも創意工夫するなど、発達段階に応じた発表を実施している。

3 事業の成果及び今後の課題

本校は平成27年に開校し、令和7年で10年目を迎え、開校前は57名であった児童生徒数は、小規模特認校制度を利用して入学してくる児童生徒が年々増加し、令和7年度は135名になった。現在では1年生しか区域外からの入学募集をしておらず、応募多数のため毎年抽選が行われている状況であることから、学区内に子育て世代をターゲットにした市営住宅の整備により、土佐山地区の移住・定住

施策の一環として、地域の活性化の貢献に寄与している。また、児童・生徒の通学に当たっては、校区外通学者にはスクールバスを、校区内通学者にはデマンドタクシーを運行している。

土佐山学の授業を通じて、児童・生徒が主体的となって、地域の活性化に貢献するとともに、地元のイベントや高知市役所等での出張販売を行うことで、地域を広くPRし続けることにより、一定の成果にもつながっている。今後は、地域が子どもたちのアイデアを地域のイベントとして継続できるよう、学校としてどのように関わっていけるかを考えていく必要がある。

また、土佐山学に繋がる特色ある教育内容に加え、英語教育にも積極的に取り組んでいることから、新たに異動してきた教職員等への周知等が今後の課題となっている。

◎ 主な質疑

- ・小中一貫教育校及び義務教育学校として開設に至った経緯等について
- ・義務教育学校における教育課程の在り方と・小中一貫教育に伴う教員同士の連携等について
- ・校区外児童・生徒の推移等とスクールバス等の運行状況について
- ・総合的な学習としての土佐山学の授業内容の継続性の確保等について
- ・土佐山学舎における校則の運用について
- ・土佐山学舎における不登校児童・生徒への対応について
- ・特別支援学級等の児童・生徒数の推移と教員等の配置状況について

◎ 主な提供資料

- ・土佐山学舎（義務教育学校）に係る資料
- ・土佐山学に係る資料

国際バカロレア教育

1 香美市の取り組みと国際バカロレア教育の導入への経緯

香美市では、郷土を愛し、探究的に学び、未来を創る人づくりを基本理念とし、探究的に学び、社会を生き抜く力をもった人の育成（探求）、市民が協働し、ともに支え合い、高め合う地域社会の構築（協働）、夢を育み、新たな価値を創造する教育の展開（創造）を基本目標に掲げた第2期香美市教育振興基本計画を令和6年3月に策定し、子どもたちに「豊かな人間性を身につけ、郷土に愛着を持ち、グローバル社会を生き抜く人」として能動的に学ぶ資質・能力を育むことを目指し、また、市民一人一人がよりよく生きるまちとして「生涯にわたる成長と学びの場」を充実・発展させることを目指している。

国際バカロレア教育については、従来の正解を求める教育から脱却することで社会の急激な変化に対応できる教育の必要性が認識し、その後国際バカロレア教育の認定校であるオーストラリアのイマニュエルプライマリースクールの視察で、子どもたちが自ら課題を持ち、解決方法を考える様子を見学し、導入に向けた取り組みを推進した。

香美市では、地域住民の応援体制が期待できること、食育を中心とした小学校の教育実践、小・中学校9年間の系統的な学びの必要性の観点から、香北地区にある大宮小学校及び香北中学校への導入を決定した。

令和3年1月に、大宮小学校が全国の公立小学校では初めて国際バカロレア教育の認定を受け、令和4年12月には香北中学校が認定校となった。保護者IBアンバサダーチームの活動や国際バカロレア教育への理解を深めるワークショップなど、地域と保護者と学校がつながり、国際バカロレア教育を軸とした小中一貫教育を進めている。また、国際バカロレア教育の実践を市内の他校に波及するために、研修、協働研究で共有して、国際バカロレア教育の考え方を取り入れた、探究的で深い学びが市内の全小中学校に普及することを目指している。

具体的には、探求あふれる学園都市、香美市とし、郷土を愛し、探求的に学び、未来を創る人づくりの取り組みとして、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることができる人に導く「よってたかって教育」や積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかける生涯学習に図っている。

2 国際バカロレアの実践

(1) 国際バカロレア教育の概要

国際バカロレア教育とは、国際バカロレア機構（昭和43年ジュネーブに設

立された非営利教育財団）が提供する国際的な教育プログラムであり、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探求心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としている。

令和6年12月時点で、160以上の国と地域地域に約5,800校の認定校、日本国内の認定校は251校、（うち学校教育法第1条に規定されている81校）という状況である。プログラムについては、3歳から12歳のPYP（プライマリー・イヤーズ・プログラム）、11歳から16歳のMYP（ミドル・イヤーズ・プログラム）、16歳から19歳のDP（ディプロマ・プログラム）、CP（キャリア関連プログラム）がある。

(2) 大宮小学校の児童数及び教職員等の配置（令和7年度）

児童・生徒数は157名

教職員は校長1名、教頭1名、教諭10名、事務職員1名、養護職員1名、学校栄養職員1名、講師1名、合計16名

そのほかに、ALT、用務員、図書支援員、特別教育支援員、児童支援員、スクールサポートスタッフ、SSW、スクール・カウンセラー

(3) 大宮小学校の学校教育目標等

大宮小学校では、人間を大切にする（自分らしく 自分で動き 探求する）ことを学校教育目標に、10の学習者像（探求する人、知識のある人、考える人、コミュニケーションができる人、信念を持つ人、心を開く人、思いやりのある人、挑戦する人、バランスのとれた人、振り返りができる人）を目指す子どもの育成を目指す子ども像に掲げ、自己調整しながら、概念的理解を深める学習者の育成を研究主題としている。あわせて、香美市立香北中学校との小中一貫教育により、国際バカロレア教育と繋ぐ9年間の学びを推進している。

また、令和7年にNHK連続テレビ小説で「あんぱん」が放映された。「あんぱん」のモデルであるやなせたかし先生から寄贈された緞帳があり、この緞帳の絵には、美しい香北の自然の中で様々な体験を通して、夢やあこがれを育んでほしいという、やなせ先生から子どもたちへのメッセージが込められている。そのため、本年度に「あんぱん」プログラムと題して、各学年が、総合的な学習（ユニット）や各教科、道徳、特別活動など様々な学習の機会を通して、やなせ先生の生き方を学んだり、作品を味わったりする学習とともに、読書ボランティアの方から、やなせ先生の作品を子どもたちに読み聞かせを計画している。

(4) 学習の枠組み等

ア 概念的理解

理解を深化させるための重要なものの見方

特徴	Form	それはどのようなものか
機能	Function	それはどのように機能するのか
原因	Causation	それはなぜそうなるのか
変化	Change	それはどのように変わっていくのか
関連	Connection	それは他のものとどのようにつながっているのか
視点	Perspective	どのような見方があるのか
責任	Responsibility	私たちにはどんな責任があるのか

イ 強化の枠を超えた6つのテーマ

地球規模で普遍的であり、世界中で学ぶ価値のあるテーマとして設定

私たちは誰なのか	Who we are
私たちはどのような場所と時代に いるのか	Where we are in place and time
私たちはどのように自分を表現 するのか	How we express ourselves
世界はどのような仕組みになっ ているのか	How the world works
私たちは自分たちをどのように 組織しているのか	How we organize ourselves
この地球を共有すること	Sharing the planet

ウ 教科の枠を超えた探求のプログラム（抜粋）

テーマ How the world works（3年）

セントラルアイデア	消費者の選択と環境は関係する
領域の必須項目	限られた資源を他の人々や生物と共有するに当たっての権利と責任
キーコンセプト 探求の流れ	①ごみの種類と行方の探求（機能） ②ごみとは何かの探求（視点） ③環境を守るために私たちにできることの探求（責任）
総括課題 一人の消費者として、地球環境を守るために取り組んだことをポスターで呼びかけよう	

テーマ How we organize ourselves (6年)

セントラルアイデア	経済は人の心理で動く
領域の必須項目	経済活動と人類及び環境への影響
キーコンセプト 探求の流れ	①お金の起源の探求（原因） ②お金と人の心の繋がり探求（関連） ③お金の概念の変遷の探求（変化）
<p>総括課題</p> <p>大宮小学校の児童として、ある夢を実現させるために、プロジェクトを計画し、クラウドファンディングを行います。プロジェクトは、グループや一人で計画し、個人で3枚のスライドにまとめてください。</p> <p>5・6年生と先生方の心を動かして、大宮寄金を集めて、夢を実現させてください。</p>	

3 地域との連携

有識者、民生委員、PTA等から組織される学校運営協議会（コミュニティ・スクール）が学校運営の方針や教育活動について話し合い、地域とともにある学校づくりを推進している。また、同協議会には、活動推進委員として、地域の方々から組織される地域学校協働本部が地域と学校が目標を共有して行う連携・協働活動することで、相互に補完し、高め合いながら、両輪で相乗効果を発揮している。

また、地域住民の応援体制が調っていたため、保護者IBアンバサダーチームが保護者主催のワークショップを開催し、情報発信するとともに、子どもたちの探究活動を地域の大人がサポートとする地域サポーターも様々な活動を実施している。

4 事業の成果と課題及びその対応

成果としては、教育的価値及び社会的価値の2点の向上が挙げられる。

1点目の教育的価値については、目的の明確化と学び方の習得、協働的な学びを中心とした探求的な学び、地域の自然や文化を教材に実践的な学びの場の提供などの地域資源の活用、グローバルなどの多様な視点の獲得などの国際的マインドセットの形成がある。また、小・中学校の卒業生からは、学習者像やATLスキルをいつも意識していたので、思考ルートができていて、自分の成長と向き合うことができた、教科の枠を超えて、より自分の生活に結ぶ学びができていたことに気が付いた、これからも色々なことに挑戦していきたいとの声、地域住民からは、国際バカロレア教育は子どもの成長に繋がり、地域の繋がりづくり、まちづくりに発展するとともに、学校を支え、香北の未来を子どもたちに託すため大

人も一緒に勉強したいとの声が寄せられるなど、一定の成果があったところである。

2点目の社会的価値については、小・中学校への入学などの人口流入効果、地域住民の教育参画により、年間ボランティア数が約600名に上るなど世代間交流の活性化、視察件数の増加など、一定の成果が確認された。

課題としては、公立校であるため定期異動があることから教員の養成、教育委員会だけでなく他の機関等との連携、国際バカロレア教育の認定にかかる費用が挙げられる。

◎ 主な質疑

- ・国際バカロレア教育の導入に至った経緯と他の小・中学校への展開等について
- ・国際バカロレア教育の推進に係る教員への取り組みと負担について
- ・大宮小学校における不登校児童数の推移と対応等について
- ・学習指導要領及び週次時程との調整等について
- ・小学校低学年における教科書との併用等について
- ・公立校における国際バカロレア教育の状況と今後の見通し等について
- ・保護者を含めた地域との連携に係る基本的考え方について
- ・小中学校9年間の系統的な学びの必要性に係る取り組み等について

◎ 主な提供資料

- ・グローバル化時代を見据えた次世代の学び
- ・国際バカロレア（IB）PYPの実践（香美市立大宮小学校）
- ・令和7年度学校要覧

〔最後に〕

以上、調査事項について資料等による説明、各委員の質疑等によって判明したことを含め、視察の概要を記した。

なお、視察項目の設定に当たっては、前述のとおり本市における現在の行政課題等を念頭に行ったものである。

また、視察時間を有効に活用するため、事前に視察項目に関する資料を収集し、本市事業との比較、検討を行った上で視察に臨んだ。

本委員会は、これらの成果を今後の委員会活動はもとより、市行政に反映させていくことを確認し、管外視察の結果報告とする。